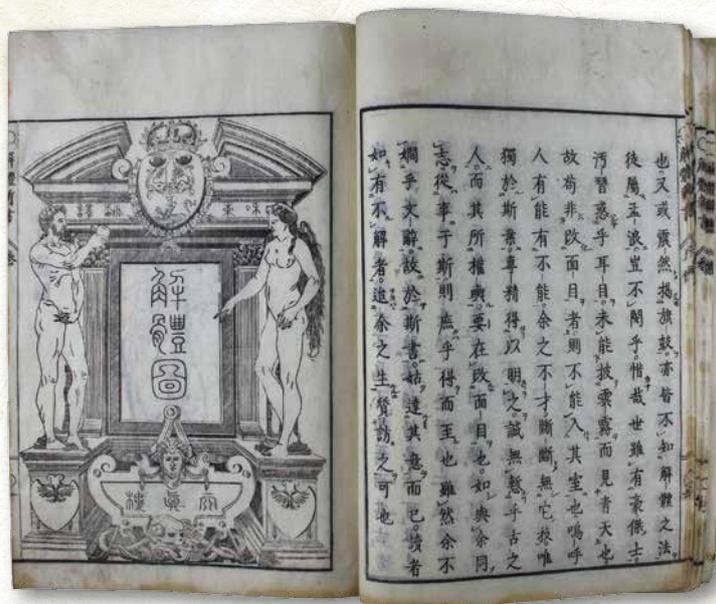


国文研ニュース

No.52 SUMMER 2018



解体新書

目次

●メッセージ

絵巻研究とデジタル画像の活用 高岸 輝 1

●研究ノート

「硯に向かひて」考 — 『源氏物語』手習巻の表現探究— 岡田 貴憲 2

国際共同研究

中近世日本における知の交通の総合的研究 デイデイエ・ダヴァン 4

国際共同研究

UC バークレー校所蔵古典籍資料のインスタレーション・キュレーション 海野 圭介 5

国際共同研究

古典芸能における身体—ことばと絵画から立ち上がるもの— 山下 則子 6

●書評

ブックレット〈書物をひらく〉6

高津孝著『江戸の博物学 島津重豪と南西諸島の本草学』..... 滝澤 みか 7

●エッセイ

共同研究（若手）「山鹿素行関連文献の基礎的研究」を終えて 中嶋 英介 8

AAS 2018 ANNUAL CONFERENCE 見聞記 入口 敦志 9

●トピックス

特別展示「祈りと救いの中世」のご案内 恋田 知子 10

平成30年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会 11

〈国文学研究資料館展示室より〉 特設コーナーのご案内 11

ホームページのリニューアルについて 11

連続講座「多摩地域の歴史アーカイブズ（古文書）を読む」を終えて 太田 尚宏 12

表紙裏反古ワークショップ 入口 敦志 12

第42回国際日本文学研究集会告知 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 14

絵巻研究とデジタル画像の活用

高岸 輝（国文学研究資料館運営委員、東京大学大学院准教授）

絵巻に対しては、国文学・歴史学・民俗学など多方面から関心が寄せられているが、ここでは美術史の側面から私が関わっているいくつかのプロジェクトを紹介しつつ、研究の展望を述べたい。

寺社の什宝や神宝として、あるいは権力者の蒐集対象として厳重に保管されてきた絵巻は、近代に入ると文化財として保護を受け、現在でも原本の公開や調査は制限されている。2017年春にサントリー美術館で開催された「絵巻マニア列伝」展は、こうした絵巻の秘蔵性に光を当てた。後白河上皇、花園天皇、伏見宮貞成親王、三条西実隆、足利歴代将軍、そして松平定信に至るまで、古代から近世の「絵巻マニア」たちによる制作・鑑賞・蒐集・貸借・修復の実態を公家日記などの記録から抽出し、これらと絵巻とを並列して展示することで、美術品の社会における位置づけを動的に把握することを目指したものであった。一例を挙げると、鎌倉末期に成立した「春日権現験記絵巻」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）は、室町以降の絵巻マニアたちによって神格化され、各時代の絵巻制作において様式の絶対的規範として仰がれたことが見えてきたのである。ともすれば、作品成立時の事実究明に関心が集中しがちな美術史の研究に対し、最近の美術展覧会は、修理・コレクション・転写といった受容や享受の実態をも見せようとするものが目立つ。

さて、絵巻が近代的な美術史研究の俎上に載せられる淵源は、江戸後期の松平定信（1758～1829）周辺にあった。そこでは、作品に関する画像情報の蓄積・分類・比較のために、模写や版画の技術が駆使された。これらの技術と写真とが併用される19世紀後半を経て、20世紀に入るとモノクロ写真が一般化し、20世紀後半にはカラー写真に置き換えられた。そして21世紀を迎え、デジタル画像へと転換した。

そのデジタル画像をめぐる状況も、ここ数年で急速に変化している。解像度の飛躍的な向上、通信速度の高速化が進んだだけでなく、国内外の美術館・博物館で所蔵作品の画像を積極的にウェブ上で公開するところが増えてきたことが大きい。「所蔵作品の高解像度画像をウェブで公開すると、実物を見に訪れる観客が減るのではないか」と考える美術館関係者は少なくないというが、この問題に詳しい学芸員によれば、それは逆であるという。むしろ、ウェブで鮮明な画像に接して作品に関心を持った人たちが、実物を確認しに来るのだ、と。確かに、展覧会の本質は作品相互の関係性や文脈を見せることにあり、

その編集作業にこそ学芸員の手腕が問われるのであるから、目玉作品数点をウェブ上の画像閲覧で代替できるような展覧会は、そもそも意味が薄い。画像の積極的公開は、目の肥えた観客を育て、展覧会の質的向上に寄与すると同時に、現代の絵巻マニアを世界中に生み出す可能性を秘めている。

膨大な数の高解像度画像がウェブ上でアクセス可能になった現在、研究者に問われるのはこれら「生」の素材を、いかに効率よく処理し調理するかという技術になろう。近年、普及段階にさしかかっているIIIF（トリプルアイエフ、International Image Interoperability Framework）は、世界各地で公開される画像を共通の規格で閲覧可能とするもので、さしあたりこの新規格をどう活用するかが課題である。そこで、人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）では、国文研の歴史的典籍NW事業をはじめ、各地の図書館等がIIIFで公開する近世絵巻から人物の顔貌部分を抽出・集積し、大規模かつ横断的な比較を可能にするプロジェクト「顔貌コレクション」（通称、顔コレ）を進めている。

絵巻の画面を構成する要素は多様である。人物や動物、建築物、樹木や岩、山や海、そして霞や雲などが頭に浮かぶだろう。そこには、時代ごと、作品ごと、あるいは絵師ごとに描き方の癖が見られる。美術史ではこれを様式と呼ぶが、様式分析にはいくつか注意すべき点がある。ひとつは、絵巻の多くが先行する作例を転写したものであるという点、もうひとつは、同一作品に複数の絵師が関与する工房制作が一般的であるという点だ。このことをふまえ、上記の諸要素の中から転写や工房制作による類似を極力排除し、絵師個人の様式を抽出しようとするとき、決め手となるのが人物の顔貌なのである。絵師個人の技術や癖を如実に示す「指紋」や「DNA」に喩えることも可能であろう。

ゲノム解読のような「顔コレ」による様式分析を、試行中の近世絵巻から、やがて古代・中世絵巻に広げていくことで、たとえば、「春日権現験記絵巻」全20巻を描いた高階隆兼たかしのりかつの工房に何名の絵師が所属していたのか、各々の癖はどのようなものか、同時代の京都や奈良に何軒ぐらゐの工房が存在し、何人ぐらゐの絵師が活動していたのか、などを把握することが可能になりそうだ。こうした様式の基礎的分析の積み重ねと、社会の中における享受の様相を重層的に捉えていくことで、新たな絵巻研究の地平が見えてくるものと期待している。

「硯に向かひて」考—『源氏物語』手習巻の表現探究—

岡田 貴憲 (国文学研究資料館特任助教)

破滅へ向かう三角関係と未遂に終わった入水自殺の果てに、凶らずも運ばれた比叡坂本・小野の山里で、なおも迫り来る憂世の疎ましさに耐えかねた女は、偶然に導かれるように人知れず出家を果たす。『源氏物語』宇治十帖後半部のクライマックスと言うべき、この浮舟出家の翌朝、巻名「手習」の由来ともなった次の象徴的な場面は、源氏絵の格好の題材として古来より印象深く親しまれている。

思ふことを人に言ひつづけん言の葉は、もとよりだにはかばかしからぬ身を、まいてなつかしうことわるべき人さへなければ、ただ硯に向かひて、思ひあまるをりは、手習をのみたけきことにて書きつけたまふ。

(『源氏物語』手習・⑥341頁)⁽¹⁾

我が子のように面倒をみている尼君の制止を破った引け目から、不揃いに削がれた乱れ髪を直すこともままならず、弱光の室内に恥ずべき姿を紛らわしている浮舟。小稿が目に向けたのは、生来の内気な性分も相俟って、思いの丈を述べる相手も得られずにいる彼女がとった、傍線部の行動である。それは従来、例えば次のように現代語訳されている。

……思案にあまる折は、ただ硯に向って手習歌のすきび書きばかりを精一杯の仕事にしていच्छる。

(『新編日本古典文学全集』)

一見何の滞りもない訳だが、波線部に注目すると、「ただ硯に向かひて」「思ひあまるをりは」とあった本文の語順が、この訳文では逆転しており、これが精確な逐語訳と言えないことが分かる。無論、古典本文を現代語訳する際に、語順の逆転により文脈を明快化することは、ごく一般の手続きに過ぎない。しかしこの場合を些末な問題として片付けられないのは、語順の逆転によって本来の表現が埋もれてしまっているためである。

それは要するに次の通りである。現代語訳によれば、浮舟は「思ひあまるをり」に「硯に向かひ」「手習を」「書きつけ」ている。この語順では〈硯に向かう〉＝〈手習を書く〉となる。一方、本文によれば、浮舟は「硯に向かひ」「思ひあまるをり」は「手習を」「書きつけ」ている。つまり、浮舟が〈手習を書く〉のはあくまで「思ひあまるをり」に限られるのであり、〈硯に向かう〉ことは、それと別個の行為として浮上するのである。この語順による違いを無視すべきではない。

浮舟は「思ひあまるをり」に〈手習を書く〉以外は、〈硯に向かう〉ことで日常を過ごしていたのであった。従来の注釈書類には、この行為に言及したものはない。では〈硯に向かう〉とは、いったいどのような行為なのか。

*

『徒然草』の有名な冒頭文、

つれづれなるままに、日くらし硯にむかひて、心につりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

(『徒然草』序段・81頁)

からも知られる〈硯に向かう〉という表現だが、これがその実『源氏物語』手習巻の直接影響下に用いられた特異表現であることは、近年、荒木浩によって指摘されている⁽²⁾。それによれば、『源氏物語』以前の〈硯に向かう〉という表現は、『公任集』にみえる次の一例に限られるという。

人の家にはなの木どもあり、女すずりにむかひてるたり

待つ人につげややらしわがやどの花は今こそさかりなりけれ

(『公任集』三〇六番)

『公任集』二九九番から三〇七番は、藤原道長が娘・彰子の一条天皇入内に際して持参させた屏風のために、公任が撰進した歌である。各歌は屏風絵に描かれた人物の立場から詠まれており、「待つ人に」の歌も、我が家の花盛りを「待つ人(=訪れない男)」に告げてやろうかという、詞書の「女」から見た内容。その女の姿が屏風絵に「すずりにむかひてるたり」と描かれているのは、男に宛てる手紙の内容を、硯に対峙して思案している体とみられる。

また荒木論文では、〈硯に向かう〉の漢語表現「対硯」の一例として、古く契沖が指摘した『万葉集』巻第十七の大伴池主による漢文序の一節、

翰^{かん}を握り毫^{ぼう}を腐^{くた}し、研^{げん}に^{むか}ひて^{かわ}くことを忘れ、終日^{もくろ}目流^めして、これを綴^あるに能^{あた}はず。

(『万葉集』巻第十七・三九七六番序・④190頁)

が示されている。「筆をとっても想が湧かず囁んで先がちびるばかり、硯に向っても思案するうち墨が干上がり、終日曲水の流れに目をやっても、詩ができない有様です」(『新編日本古典文学全集』現代語訳)と訳される「対研(=対硯)」の姿は、さきの屏風絵の女のそれと重なり合う。〈硯に向かう〉とは、目の前の硯と向かい合い、紙に記す文面をひたすら思案する行為なのだと理解すべきであろう。

*

そのような思案の最中、人は硯と対峙しながら何をしているのか。この問題について、物語の先例は興味深い視点を提供してくれる。

…この女、例ならぬ気色を見て、いと心憂しと思ひて、前なる硯に手習ひをして、かく書きつく。

この世にはつらき心も知りてはぬ契りし後の世をも見てしが

と書いて、押しわごみて置いたるを見て、あはれと思ふ。
 (『うつほ物語』嵯峨の院・①366頁)

『うつほ物語』のヒロイン・あて宮の、数多い求婚者の中の一人である源仲頼が、彼女への執心から酒に溺れる様子を見て、妻(女)は後世の頼めぬ夫婦仲を嘆く。その思いをしたためる際に「前なる硯に手習ひをし」たというのは、紙に記す前に、まず硯の上に試し書きをしたということであろう。この硯の上に書きつけるという行為は、他の例からも確かめることができる。

中のおとどに庚申したまひて、男女方分きて石弾きしたまふ。侍従、御前なる硯に手まさぐりして、

寝る間なく嘆く心も夢にだに会ふやと思へばまどろまれけり

と書くままに消えぬ。あて宮、見ぬやうにてもものたまはず。
 (同祭の使・①506～507頁)

あて宮の実兄として道ならぬ恋に悩む源仲澄(侍従)。忌日のため遊戯に夜を明かす庚申にかけて、彼はあて宮への恋情を訴えるが、硯の上に書きつけられたその歌は、あて宮が見ぬふりをする間に消えた。仲澄は、妹への許されざる思いを周囲の人に悟られぬよう、そのような方法をとったのである。

これに類する行為は、その後『源氏物語』においても、
 姫君、御硯をやをら引き寄せて、手習のやうに書きませたまふを、「これに書きたまへ。硯には書きつけざなり」とて紙奉りたまへば、恥ぢらひて書きたまふ。

(『源氏物語』橋姫・⑤123頁)

と現れる。硯の上に手習の真似事をする大君(姫君)を見て、父・八宮が注意し紙に書かせたという同場面からは、紙に

書くには及ばない手すさびを硯の上に書きつけるさまが看取されるが、硯に対峙し思案する人の姿をそこに照らし合わせることは容易い。

もしくは、柏木の未亡人・落葉宮に思慕する夕霧が、宮の母御息所から寄越された消息を妻・雲居雁によって隠され、返事を書くことができずに、

蜩の声におどろきて、山の蔭いかに霧りふたがりぬらむ、あさましや、今日この御返り事をだに、といとほしうて、ただ知らず顔に硯おしすりて、いかになしてしにかとりなさむとながめおはする。

(同夕霧・④432頁)

と途方に暮れる場面からは、墨を押し磨りながら思案する姿を〈硯に向かう〉行為に投影することも可能となろう。

手習巻の浮舟が、硯の上に手すさびを書きつけていたか、墨を押し磨っていたか、はたまた黙然としていたかは、本文からは詳らかにできない。しかし彼女にとっての出家後の日常は、何より硯を目の前にして独り思案に耽ることだったのであり、思案が胸中に収まり切らなくなった時に初めて、浮舟は紙を取り手習を書きつけたのであった。

浮舟が思案したのは手習歌の内容だったのか、あるいは『公任集』の女のような「待つ人」への手紙の文面だったのか。事は鑑賞の問題として、読者の想像に委ねられる。

注

- (1)『源氏物語』『うつほ物語』『徒然草』『万葉集』の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)、『公任集』の引用は『新編国歌大観』(角川書店)による。
- (2)荒木浩「心に思うままを書く草子」(『徒然草への途—中世びとの心とことば』勉誠出版、2016年)。



国文学研究資料館蔵『源氏物語絵巻』(浮田一蕙筆、江戸後期)

国際共同研究

中近世日本における知の交通の総合的研究

ディディエ・ダヴァン（国文学研究資料館准教授）

本研究でいう「知の交通」とは中世末期から見られる日本社会での知識の新しい動きをさしている。中世までは日本の知識が概して公家、僧侶、または武士といった限られた階層に独占されていたと言えるが、室町末期から政治的や経済的に日本が大変動すると、富裕な商人をはじめ、徐々に大きくなった新しい社会層が歴史の舞台上がり、学問、宗教、文学などの知識を求め始めた。そこから「知」が新しい層へ広まり始めるが、その過程は一方的な発信ではなく、むしろ常に流動する状況のなかで発信する側と受信する側がお互い影響し合って、日本文化に巨大な役割を果たした。ここで「知の交通」と呼んでいるこの現象は、中世から近世末期にかけて新しい日本社会に新しい文化を形成する原動力になったと言える。この共同研究の目標は様々な分野からとった具体例の検討を通して、その現象に光を当て、分野横断的に再発見し、その特質を考究し、日本文化史の中に位置づけなおすことである。

研究の範囲を絞るには、まず「知の原典」を代表する四つのテキストを導線にし、それに纏わる周辺の書籍を中心に置く。それらのテキストは、臨濟宗の基本的な公案集である『無門関』、江戸時代に「古典」の地位に就いて日本社会に深く染みついた『徒然草』、日本の『和漢三才図絵』に直接に影響を与えた中国明代類書の『本草綱目』と西洋の知の一種を日本に伝播した『イソップ寓話』である。

進行方針としては、次の三点の解明に努めることになる。

－階層の研究。 「知」を教える層と教わる層を特定するのは容易な作業ではない。当然ながら、知の交通はただの講師と生徒の関係に限る訳ではない。社会そのものが大きく変わることによって、知識が上層の知識人から新層へという下向きの動きがすべてだったわけでは決してなかった。近世にはそれはさらに顕著になり、誰が誰にどういう知識を伝えるかを把握するのは重要な作業になる。

－様態の研究。 検討できる「知」の具体的な形は言うまでもなく書物である。その内容を読む前に、本研究に貴重な情報として、書誌学から得られるものがある。大きさ、絵の有無、表紙などを見るだけで書物の格、従って書かれてある「知」の地位が窺える。また、用字の詳細な分析によって想定読者がある程度推定できる。返り点の有無や施し方、振り仮名の頻度、専門用語などを見ると、様々な事が見えてくる。

－形式の研究。 知の交通が生んだ知識は様々な形を取っているが、如何に有形化されていたのかは本研究の最終的

目標とでもいえる。

現段階では「知の原典」に続き以下の資料群を研究対象に想定している。

1. **注釈・訳解**：仏典や漢籍などに施される注釈、蘭学の訳解などを考察する。従来の研究の蓄積と接続させながら、知の変容のすがたをたどる。
2. **随筆・筆記**：自由に語られている文に原典の新しい観方がどう受け継がれていたのか、または作られたのかを検討する。
3. **書簡**：宗教者が個々の弟子や信者に宛てた書簡は蒐集され、刊本としても享受された。その過程で用字・用語の漢字化や和文が行われ、改変が加えられていく書簡は知の交流を齎した注目すべきメディアといえよう。
4. **語録・法語**：高僧の言行を集録した語録は、とくに禅宗で弟子が祖師の教えを筆録したものをさし、中国宋代以後の文体は口語体に近い点も注目されている。法語は日本ではいわゆる仮名法語をさし、鎌倉時代の新興仏教の祖師や弟子の手によるものが多い。語録・法語は内容のみならず、文体や女性の享受の問題を考える上でも有意義な資料群である。

共同研究の組織は国文学研究資料館とフランスのパリ第7大学を軸にしており、そのメンバーは以下の通りである。

代表者：ディディエ・ダヴァン（国文学研究資料館）

- 鈴木健一（学習院大学）
- 堀川貴司（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）
- 齋藤真麻理（国文学研究資料館）
- 入口敦志（国文学研究資料館）
- 恋田知子（国文学研究資料館）
- クリストファー・リーブス（国文学研究資料館）
- 滝澤みか（国文学研究資料館）
- ジャン＝ノエル・ロベール（コレージュ・ド・フランス）
- アニック・堀内（パリ第七大学）
- ダニエル・ストリューヴ（パリ第七大学）
- マティアス・ハイエック（パリ第七大学）
- イフォ・スミッツ（ライデン大学）

国際共同研究

UC バークレー校所蔵古典籍資料のインスタレーション・キュレーション

海野 圭介 (国文学研究資料館准教授)

カリフォルニア大学バークレー校 (以下、UCB と記す) のジョナサン ズイッカー氏を代表に2018年度から3年間の予定で標記の共同研究が開始された。

近年の物質文化 (material culture) への関心の高まりによって、物質としての書物自体の分析を通じた書物と社会の関係性の検討、書物の精緻な分析による社会知の流通に関する検討など、人文学における新たな課題が提示され、研究領域が開かれてきている。書物の理解のためには原典資料の調査とその分析の経験を欠くことはできないが、日本国外においてはその環境が整う機関は多くはない。UCB の C. V. スター東アジア図書館は三井家旧蔵本を含む多くの日本古典籍を所蔵する米国有数の機関であり、書物そのものの分析を通じた物質文化としての日本の書物文化の検討を行う環境が整っている。

本研究はUCB所蔵の書物そのものを対象とした研究を企画しつつも、[1] 原本資料、[2] デジタル化技術 (画像化技術)、[3] インターネット環境のそれぞれの特性を十全に活用した新たな共同研究の手法の開発を通して、書物文化の実態解明とともにその広域的理解の推進を行うことを目的としている。情報発信と共同研究のプラットフォームとしてのweb環境や遠隔地間における共同作業のモデルを構築しつつ、UCBが所蔵する原典資料を用いた共同研究が行われるよう計画されているといえる。対象とされる書物文化のトピックスは2つで、1点目はC. V. スター東アジア図書館に所蔵される三条西家旧蔵和歌詠草の原本の分析とその原本としての特徴を伝えることを考慮したデータベース化が企画されている。和歌が作成されてゆくプロセスを示す資料群 (作法書、歌学書、御会資料など) や歌人の経歴を伝える資料群などについても情報収集と分析を行い、和歌を詠む行為が立体的に理解され、またその社会

的意義が理解できるような情報発信の検討も試みられる予定である。2点目はC. V. スター東アジア図書館蔵書のもう一つの特徴である江戸期の出版物を用いた共同研究で、web環境上で日米双方の研究者・大学院生が共同で翻刻や注釈を行ってゆく計画が立てられている。UCBの蔵書は日本の近世文化を理解するための重要な知的情報源でもある。豊富な蔵書と遠隔地でも利用可能な当館の新日本古典籍総合データベースなどを活用し、UCB、日本側双方からの参加者が共通するデータにコメントや翻訳、必要な情報へのハイパーリンクなどを付しながら注釈的に読み進めつつ討議が行われる予定である。

上記は文学・文化学分野の研究者にコンピューターサイエンスの研究者、図書館情報学の識者等を交えたメンバーで構成され、web環境の十全な活用によって日米を往還する形でデータが集積され、書物文化への理解が深化してゆき、それを英語圏での利用にたえる形で情報発信するという調査・研究・情報発信のシームレスな展開が試みられることになる。

共同研究の組織は以下の通りである。

ジョナサン ズイッカー (カリフォルニア大学バークレー校)
マック ホートン (カリフォルニア大学バークレー校)
マルラ 俊江 (カリフォルニア大学バークレー校)
永崎研宣 (一般財団法人人文情報学研究所)
佐藤至子 (東京大学)
木越俊介 (国文学研究資料館)
盛田帝子 (大手前大学)
大山和哉 (同志社大学)
海野圭介 (国文学研究資料館)
高木元 (大妻女子大学)



国際共同研究

古典芸能における身体—ことばと絵画から立ち上がるもの—

山下 則子 (国文学研究資料館教授)

この研究の目的は、日本古典籍に表現されている古典芸能の身体性に注目して、日本文化の身体性の問題に多方面から迫り、文芸研究の新たな地平を築くことである。本共同研究では、日本古典籍の絵画性に注目し、「身体」という世界共通の概念を望見することにより、海外日本文学研究者にとって高い壁となっている「古典資料を用いた古典研究」を可能とすることを企図している。そして本共同研究は、若手研究者の育成を強く意識している。

本共同研究は、主にイタリア4校の日本文学研究者達と、日本の芸能研究者から成る組織である。国文学研究資料館とイタリア日本文学研究者との繋がりは古く、1980年代に遡る。国際日本文学研究集会を契機とする武井協三名誉教授とボナヴェントゥーラ・ルベルティ教授との演劇研究による結びつき、フィレンツェでの安永尚志名誉教授と鷺山郁子教授との交流に、その端を発している。2000年以降も山下則子を中心とするイタリア4カ所での日本古典籍調査へのイタリアの大学院生の支援という側面もあり、学術交流協定も最も古くから結ばれ、AISTUGIA (イタリア日本研究学会) との協力関係も結ばれていて、当館との繋がりは深く多彩である。

今後の課題は、古典芸能研究者が少ない国文学研究資料



山東京伝賛・初代歌川豊国画 文化6年7月
(からすの身振り・国文学研究資料館蔵・ユ3-215-2)

館において、芸能に関わる共同研究を運営することの難しさ—古典芸能には多くの決まり事があり、秘伝となっているものも多い。その研究には前段階としての知識や必見資料が国文学研究資料館以外に多く存在する等—がある。しかし、日本古典籍のみならず、多くの芸能資料や浮世絵が早稲田大学演劇博物館等の諸機関からデジタル公開されている現在では、ヴィジュアル要素の強い資料を利用した芸能研究は、国際共同研究の対象として十分に可能であると考える。

本共同研究の組織と各自の研究テーマは以下の通りである。

ボナヴェントゥーラ・ルベルティ (ヴェネチア大学 カ・フォスカリ) : 近松の人形浄瑠璃

鷺山郁子 (フィレンツェ大学) : 謡曲における平安文学の受容

マティルデ・マストラランジェロ (サピアンツァ ローマ大学) : 話芸における身体

ガラ・マリア・フォッラコ (ナポリ大学 オリエンターレ) : 永井荷風と江戸演劇

ロベルタ・ストリッポリ (ニューヨーク州立ビンガムトン大学) : 白拍子と中世文学

兵藤裕己 (学習院大学) : 中世から近代の語り物芸能と口承文学

矢内賢二 (国際基督教大学) : 近世・近代歌舞伎における「型」意識の生成

今岡謙太郎 (武蔵野美術大学) : 近世・近代の話芸と文学

小笠原匡 (公益社団法人・能楽協会会員) : 演者から見た狂言の身体性

武井協三 (国文学研究資料館名誉教授) : 『役者絵尽し』と元禄歌舞伎の身体性

山下則子 (国文学研究資料館) : 近世文学と芸能の繋がり
【以下若手研究者】

ダニエラ・モーロ (ヴェネチア大学 カ・フォスカリ) : ジェンダー論と古典芸能

エドアルド・ジェルリーニ (フィレンツェ大学) : 詩宴、歌合の中のパフォーマンス

ステファノ・ロマニョーリ (サピアンツァ ローマ大学) : 政治講談とパフォーマンス

クラウディア・イアツェッタ (ナポリ大学 オリエンターレ) : 謡曲の中の植物精霊

ブックレット 〈書物をひらく〉 6

高津孝著『江戸の博物学 島津重豪と南西諸島の本草学』

滝澤 みか (国文学研究資料館機関研究員)

島津重豪(1745 - 1833)は江戸後期に生きた薩摩藩藩主であり、自身の娘が徳川将軍家に嫁いだことにより権力を持った一方、多様な学問を通して藩の文化にも大きな影響を与えた。本書では、その重豪に関わる「特異な発展を遂げた薩摩藩の本草学」に焦点を当てている。重豪を取り巻く学問・文化については、最近では鈴木彰氏・林匡氏編により、『アジア遊学190 島津重豪と薩摩の学問・文化 近世後期博物大名の視野と実践』(勉誠出版、2015刊)が刊行されており、高津氏も同書の中で「蘭癖大名重豪と博物学」を執筆されている。重豪に関連するものとして、氏には『博物学と書物の東アジア—薩摩・琉球と海域交流—』(榕樹書林、2010刊)の著書もある。本書は一般向けに、それらをより読みやすくした内容となっている。

本書の構成は三章から成る。「一 薩摩の博物学と島津重豪」は、重豪の命により作られた『質問本草』の作者偽装の解明から始まる。薩摩藩主導で、本草学の本場・中国での調査を以て作られた『質問本草』が、なぜ琉球人の名前を編者に据えているのか。その問題が解き明かされていく過程は読者を惹き付ける。そこには薩摩藩に限らず、琉球・中国を含むアジア各地域の当時の関係が影響しており、重豪周辺の本草学の問題を広い観点から丁寧に捉えていこうとされる氏の姿勢が窺えよう。こうした巨視的な問題提起が可能である背景には、氏が多様な和漢の古典籍に接し、その調査・整理をされていたことが関わっている(「あとがき」より)と考えられ、厳密な調査が大きな視野の土台となっていることが分かる。本章では重豪と本草学者・曾槃との関わりやシーボルトとの出会い、そして当時「蘭癖」とされた重豪が「異国文化全体に対してきわめて高い関心を有した大名」であったことも紹介されている。

続く「二 琉球への視線」では、『質問本草』の背景にある、南西諸島の生物相の歴史的展開を琉球の外・内の二方面から追う。琉球外では、中国王朝からの使節による報告書などにおいて琉球の生物相が記録されていくことに着目する。中でも清で出版された『中山伝信録』を取り上げ、それに基づき日本で作られた『中山伝信録物産考』の著者である、江戸の本草学者・田村藍水の情報収集先が薩摩藩であろうことや、同じく藍水の著した『琉球産物志』もまた重豪と関わることを明らかにしている。先行研究において、『琉球産物志』には琉球の産物は含まれないとされてい

る点、高津氏は藍水の記述や内容、編纂経緯を再検討し、異なる結論を示している。さらに同書編纂の基盤となる、薩摩藩による標本収集の実施が裏付け出来る資料も紹介し、その成果の一部は木村兼葭堂に渡る流れをも捉えており、これらを江戸の博物学が視線を拡大していく例として重視し

ている。琉球内からの関心による進展としては、琉球の医学者・渡嘉敷通寛著『御膳本草』がある。通寛による本草学の研究の展開も多様であり興味深い。以上のように、南西諸島にまつわる各調査の背景を明らかにすることで、知の「欲望」の交錯が学問を進展させていたことを示している。

「三 大名趣味としての鳥飼い」では、鳥獣に関する書物を通して藩や国の繋がりに注目する。『唐蘭船持渡鳥獣之図』に見える幕府とのやりとりからは、薩摩藩の博物学が、珍しさを測るための物差しとなっていたことが分かる。さらに、『鳥賞案子』からは重豪が多様な人材を抱え込んでいた様子が見え、彼の知的欲求を支えたこのような人間は周辺に複数いたであろうことを想像させる。また、重豪周辺には西洋の図譜の収集も推定出来るということであるから、規模の広さも特徴的である。重豪のもとで制作された可能性が高い『島津禽譜』からは多くの大名との交流が見えるが、本草学や博物学への関心の高まりや、それに関わる書物を収集する動きは、規模こそ異なるが他藩でも類例があることも併せると、それらの状況についても詳細な調査が必要となってくるであろうことが予想され、その比較・検討により、各藩の特徴をさらに顕著にすることも可能と考えられるのである。

「あとがき」において、氏は中国の古典文学・中国書誌学を専門とされ、「本来、博物学の専門家ではない」旨、断りを入られている。しかし、それゆえにもたらされる客観的な見地と随所で漢籍などとの連動が指摘されることにより、本書は国際的視野を読者に与え、薩摩藩に関わる本草学・博物学の書物と人の流れの研究の奥行きを見せることに成功していると言えるのである。



共同研究（若手）「山鹿素行関連文献の基礎的研究」を終えて

中嶋 英介（西安外国語大学外籍教師）

平戸山鹿家旧蔵の資料に初めて触れたのは、蘭州（中国・甘肅省）に住んで間もない2011年のことでした。上京ついでに気軽な気持ちで国文学研究資料館へ行くと、そこに待ち構えていたのは平戸の資料を網羅した『山鹿家積徳堂文庫目録稿』（以下『目録稿』と表記）のリスト三冊（A・B 第一・B 第二）と、重要文化財指定資料等が収載された別ファイルです。『山鹿素行全集 思想篇』（以下『全集』と表記）と日本思想大系等の翻刻資料で素行の文献を間に合わせていた身としては、膨大な資料数に衝撃をうけるばかりでした。

その後一時帰国の合間に立川へ赴き、撮影を行う日々が続きました。しかし資料の検索は思うままにいかず、一人で撮影を難くこなせるわけでもありません。『目録稿』を参考に撮影できても見落としはあるだろう…。不安を薄々感じていた時に、共同研究（若手）の公募を知りました。海外在住の自分が申請できるのか色々と思うところはありませんでしたが、なりふり構ってられません。とにかく山鹿文庫の全容を知りたい、リストを日本に限らず海外の日本研究者に発信したいという思いで応募しました。無事採択をいただいた後、目標を山鹿文庫リストのデータ化、各地への資料調査、そして『全集』上の問題点を発表することの三つに絞り、作業を開始しました。

二年の研究期間の中で、中国在住の代表者が日本で調査できるのは数ヶ月にすぎません。夏・冬休みの間に共同研究員（石橋賢太・島田雄一郎・吉川裕）と協力研究者の森本輝嗣とともに、国文研にてリスト作成と撮影にひたすら打ち込む日々がはじまりました。1300件を超える資料のデータ化は容易ではありませんが、協力者の尽力を得て1年目には全資料名の打ち込みがなんとか終わり、仮リストを日本思想史学会大会等の研究会で配布し、好評を得ることができました。その後仮リストを手がかりに蔵書傾向をつかみ、兵学書や城図・縄張図、文学作品も網羅されている山鹿文庫の魅力を研究者に紹介しました。中国在住時には『全集』と撮影資料を照合し、恣意的な削除箇所や書誌情報の誤謬も発表できました。

資料調査は平戸・弘前等へ赴き、素行原著の『武教全書』の注釈書等を共同研究員とともに撮影し続けました。当初は素行関連文献のみを調査する予定でしたが、本共同研究の調査の中で『護園蔵書目録』（松浦史料博物館蔵）を発見できたのは、大きな収穫でした。『護園蔵書目録』は近世の思想家荻生徂徠（1666～1728）が開いた私塾「護園」の蔵書目録ですが、これまで静嘉堂文庫蔵本しか知られず、成

立年代が不明な故か、研究史上ほとんど取り上げられてきませんでした。それが今回の調査で平戸藩主松浦静山（1760～1841）の蔵書に奥書付の『護園蔵書目録』（天明6〔1786〕年写）が発見されることで、改めてその価値を検証することが可能となったのです（吉川裕「二つの『護園蔵書目録』—荻生家の蔵書変遷について—」〔『国文学研究資料館紀要文学研究篇』44号、2018〕参照）。

こうした作業や発見が進むと、研究会参加は楽しいものです。当初はリスト作成を第一目標としていましたが、研究を進めるうちに山鹿文庫の資料を海外へ発信するという、次の使命感が湧いていました。北京・済南で開催された日本学関連の研究会で発表し、少し(?)足を伸ばしてレスブリッジ大学（カナダ・アルバータ州）で山鹿文庫を紹介できたことも良き思い出です。さらに報告を兼ねた立川での研究会では、アドバイザーの太田尚宏先生から思想史と国史の研究手法の違いのみならず「基礎的研究」とは何かを教わりました。まだまだ調査・翻刻せねばならない資料があると思うと道は険しいですが、それが研究というものでしょう。共同研究を経て次への課題に向かう舞台に立てたと思えば、前向きな気分になれたのは確かです。

海外の大学に籍を置く私は研究者番号を持たず、科研費の申請ができません。こうした現状の中でいただいた共同研究の機会は、自分と研究活動をつなげる命綱でした。海外での日本研究は孤独な作業になりがちですが、共同研究員の方々とやりとりは、新たな出会いとともに自分が孤独ではないという意味で、大きな励みになりました。

当時を振り返ると、今なお数多くの方々にお世話になったと実感します。一人ずつお名前を取り上げることは致しませんが、山鹿素行の御子孫である高橋さまと素子さまには特にお世話になりました。また、中国内陸部で作業を続けるしがない若手研究者の質問に暖かく対応して下さった国文学研究資料館研究協力係の皆さま、共同研究上の課題だけでなく、中国で日本の研究を続ける自分が抱える悩みに耳を傾け、堅実なアドバイスをいただいた太田先生に、心より感謝を申し上げます。国文研の共同研究が、今後も数多くの若手研究者にとっての希望となるよう、遠き西安の地から願う次第です。

AAS 2018 ANNUAL CONFERENCE 見聞記

入口 敦志 (国文学研究資料館教授)

本年3月、AASに参加するために、はじめてワシントンDCを訪れた。Marriott Wardman Park Hotelを会場として、22日から25日までの4日間に443ものセッションが行われた、大規模なアジアに関する国際学会である。国文学研究資料館では、22日にビジネスセッションとして次のようなプレゼンテーションを行った。

“PRE-MODERN JAPANESE BOOKS: ISSUES OF MAINTENANCE, UTILIZATION, AND PUBLIC CIRCULATION”

- ・開会挨拶／今西祐一郎
- ・新日本古典籍データベースについて／松原恵
- ・コーニツキ版欧州日本古書総合目録について（「江戸時代初期出版と学問の総合的研究」）／海野圭介
- ・Studies in Japanese Literature and Culture の創刊について（「境界をめぐる文学—知のプラットフォーム構築をめざして—」）／齋藤真麻理
- ・中近世日本における知の交通の総合的研究（「中近世日本における知の交通に関する総合研究」）／ディエ・ダヴァン
- ・UCバークレー所蔵古典資料のインスタレーション・キュレーション／海野圭介
- ・「ないじえる芸術共創ラボ」の活動／有澤知世

AASの直前にCEALが開催されていて、北米主要図書館の東アジアの図書に関わっている司書の方々が集まっていたこともあり、日本の古典籍への関心の高さから30人を越える多くの方々の来場があった。質疑も活発で、古典籍のデジタル化に関するいくつかの提案もあり、成果は大きかったと言えるだろう。同日、ロバート キャンベル館長が“The Next Decade of Information Resource Sharing in Japanese Studies: Celebrating NCC’s Past and Envisioning the Future”と題して、基調講演を行った。

その後、私は以下の3つのセッションに参加した。

1. The Materiality of Reading in Premodern Korea: Voice, Image, and the Book (23日)
2. Selling the Classics: Heian Literature (23日)
3. The Handwritten and the Printed: Mediums of Literature in Early Modern Asia (24日)

2は平安時代の物語類の漫画化をテーマにしたセッション。良く知っている物語とその漫画化なので、英語力に不安のある私にも内容は理解できた、と思いたい。ICUのMika Saitoさんの『竹取物語』の発表で、かつてはかぐや

姫を小さな大人として描いていたのに、現代の漫画では子どもにも描くという指摘は大変面白かった。

1と3は書物をめぐる問題を扱ったセッション。1の韓国のセッションは、モノとしての本という視点から、表記方法や挿絵、出版形態などを採りあげたもので、大変興味深く聴いた。例えばKyng Hee Rhoさんの“Metal-type Books and Their Readers in Premodern Korea”では、同じ内容の書物でも活字と整版では読者層が異なるというような、書物の出版形態による位相差などが問題にされていた。“Hear It, Picture It: Reading the Text through Visual Aspects of Books”と題したHeekyung Leeさんの発表も、「口訣」「諺解」「図」「相」などを鍵にしなが、それに対応する読者層を探るもの。いずれも書物の「読者」を明らかにしようとする点で共通しており、刺激的であった。

3では、シンガポール、中国、日本といった異なった地域の写本と刊本との問題をあつかったセッション。こちらは、上記のセッションと違い、書物を製作する側に対する考察が中心となっていた。

いずれのセッションも、休憩をはさむことなく、質疑応答を含めて2時間をみっちり使い切るほどに熱が入っていたことは印象的であった。

25日にはフリーアギャラリーを訪問した。オーソドックスな常設の展示と、工夫を凝らした特別展示との対比に興味深く見た。特別展示“RESOUND: Ancient Bells of China”は、中国古代の金属製の楽器「鐘」をあつかう。照明や配置はもちろんのこと、目には見えない「音」を視覚的に、しかも美しく見せる工夫もあって、古代の器物を展示するとともに、それにインスパイアされた新たな芸術作品を創造するという意欲が見られた。当館が進めている「ないじえる芸術共創ラボ」とも重なる部分があり、大変参考になった。



国文研によるビジネスセッション

特別展示「祈りと救いの中世」のご案内

大陸より伝来した仏教は、古代において王権と結びつき国家宗教として日本に定着しました。不安定な政局と度重なる戦乱により混迷をきわめた中世には、人々は日常の不安や死後への恐れから仏教に救いを求め、寺院側も公家や武家はもちろん庶民にいたるまで積極的に教えを広め、さまざまな信仰形態を生み出しました。

とりわけ、平安末期から鎌倉初期に、華麗な修辭を施した表白や当座の機知に富んだ説法の詞で、多くの聴衆を魅了した澄意・聖覚の父子を始発とする教宣活動は、日本の宗教文化史の上で特筆すべきものといえるでしょう。彼らの活動はその居住地にちなみ、安居院流と呼ばれ、継承されてゆきます。魅力的な説法で人々を仏道へと導く唱導は、物語や芸能、絵画とも結びつき、中世の文学や文化に多大なる影響を与えたのです。

本展示では、寺院に現存する貴重な古典籍を中心に、中世における唱導の実態とその文芸的展開について紹介します。中世の人々は死や死後の世界をどのようにとらえ、いかにして仏に救いを求めたのでしょうか。安居院の唱導とはどのようなもので、文芸といかなる関わりを見せたのでしょうか。中世文学に底流する唱導の世界をぜひご堪能ください。

◇会 期：2018年10月15日（月）～2018年12月15日（土）

◇休 室：日曜・祝日・展示室整備日（11月14日）

◇開室時間：午前10時～午後4時30分 ※入場は午後4時まで

◇場 所：国文学研究資料館1階 展示室

◇入場無料

◇主 催：国文学研究資料館

◇共 催：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構、国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター、國學院大學博物館、神奈川県立歴史博物館、神奈川県立金沢文庫、名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター

◇主な展示品：国宝・称名寺聖教（『言泉集』『転法輪鈔』）、重文・最明寺蔵『往生要集』、真福寺聖教（『説経才学抄』）、国立歴史民俗博物館蔵『源氏供養』、宮内庁書陵部蔵『紫式部石山詣図』、国文学研究資料館蔵『富士の人穴草子』など約90点。

◇関連イベント：「古典の日」講演会、ギャラリートーク、セミナーの開催

関連イベントの詳細は、ポスターやチラシ、当館ホームページ等でお知らせいたします。多くの皆様のご来場をお待ちしております。

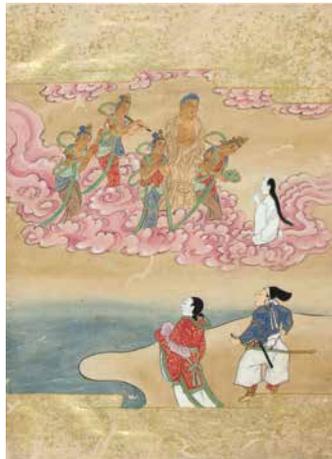
なお、本展示は、人間文化研究機構「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業『列島の祈り』」によるもので、名古屋大学科研・基盤研究（S）「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究—人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」の研究成果の一端でもあります。「列島の祈り」を共通テーマに、同時期に開催される下記の展示と連携して実施いたします。こちらも本展示とあわせて、ぜひ足をお運びください。

◇國學院大學博物館「舞楽」（仮）9月15日（土）～10月28日（日）、「列島の祈り—祈年と新嘗・大嘗の祭り—」及び「仏教儀礼と神々」（仮）11月3日（土・祝）～1月14日（月・祝）

◇神奈川県立歴史博物館「鎌倉ゆかりの芸能と儀礼」10月27日（土）～12月9日（日）

◇神奈川県立金沢文庫「顕われた神々—中世の霊場と唱導—」（仮）11月16日（金）～1月14日（月・祝）

（恋田 知子）



国文学研究資料館蔵『富士の人穴草子』（江戸時代前期）
写 奈良絵本（貴重書 99-193-1～3）

仁田四郎忠綱が浅間大菩薩の導きで富士山の洞窟を探検し、地獄や極楽の諸相を見聞する異界遍歴の物語草子。室町時代末期成立。地獄での責め苦や女性の往生を目撃する場面。

平成30年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会

古典の日は国民が広く古典に親しむことを目的として、平成24年3月に法制化されました。11月1日に定められたのは、我が国の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、最も古い記述が寛弘五年(1008)11月1日であるためです。

当館は、「古典の日」の趣旨に賛同し、平成24年度から記念の講演会を催しております。古典に親しむ絶好の機会となりますので奮ってご参加ください。



日 時:平成30年11月3日(土・祝) 13時30分～16時00分(開場:12時30分)

会 場:イイノホール(東京都千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング)

・東京メトロ 日比谷線・千代田線「霞ヶ関」駅 C4出口直結

講演内容及び講師:

1 源氏供養と石山寺

小林 健二(室町期文芸、国文学研究資料館副館長・教授)

2 藤原道長「望月の歌」詠歌から千年 和歌に詠まれた真の意味

山本 淳子(平安朝文学、京都学園大学人間文化学部教授)

聴講料: 無 料

※事前申込が必要です。お申し込み方法については、当館WEBサイト(<https://www.nijl.ac.jp/>)をご確認ください。

申込締切日:平成30年10月5日(金) 必着 ※先着450名様に受講票をお送りします(はがきまたはメール)。

お問い合わせ先: TEL:050-5533-2910 E-mail: event@nijl.ac.jp

<国文学研究資料館展示室より> 特設コーナーのご案内

当館展示室で開催されている通常展示の一角に『特設コーナー』が設けられています。『特設コーナー』では展示ケース4台を使用し、主に新収資料を中心に一つのテーマに絞った展示をしております。また同時にデジタル展示も行っており、展示中の資料の詳細な画像をモニターでご覧いただけます。

また、「古典AR」では、モニター画面にタブレットやスマートフォンをかざすことにより、資料の翻刻や詳細情報を得ることもできます(専用アプリのダウンロードが必要です)。

特設コーナーは約2ヶ月に一度展示替えを行います。7月12日からは「淀藩・稲葉家のアーカイブズ」、10月15日からは源氏物語関連の展示が行われます。今後もぜひご注目ください。

平成30年度 特設コーナー展示スケジュール

| 期間 | テーマ |
|---------------|----------------|
| 7月12日～9月15日 | 淀藩・稲葉家のアーカイブズ |
| 10月15日～12月15日 | 源氏物語 画帖と古写本 |
| 1月15日～3月12日 | 山鹿文庫関連(仮) |
| 3月14日～5月中旬頃 | 新収絵巻・奈良絵本関連(仮) |

※展示室開室時間:午前10時～午後4時30分(入場は午後4時まで)

日曜日・祝日、夏季一斉休業日、展示室整備日は休室となります。詳しくはホームページでご確認ください。

(<https://www.nijl.ac.jp/event/#exhibition>)

ホームページのリニューアルについて

当館WEBページがリニューアルされ、4月末より新サイトが公開されています。

新コンテンツ「古典に親しむ」では、江戸料理本やくずし字の基礎知識を公開している他、毎月当館の教員を紹介する「立川の研究者たち(えくてびあんより転載)」を更新していきます。

ぜひ一度ご覧ください。<https://www.nijl.ac.jp/>

連続講座「多摩地域の歴史アーカイブズ（古文書）を読む」を終えて

5月10日（木）から7月5日（木）まで、連続講座「多摩地域の歴史アーカイブズ（古文書）を読む」（全8回）が開催されました。国文研が立川に移転してから今年2月で10周年になることを記念しての企画です。

国文研には、旧文部省史料館時代から収集されてきた歴史アーカイブズ（大名・村方・商家・戸長役場・県庁文書など）が約60万点収蔵されています。今回の連続講座では、これらの中から多摩地域に関わる資料群を選んで各回のテーマを設定し、受講者の方々とともに解説したうえ、担当講師がくずし字の特徴や読み方、文書がつけられた歴史的背景などについての解説を試みました。テーマは、大岡忠相の地方御用、玉川上水、秋川の鮎漁争論、天保の飢饉、村の不行跡者、幕末維新期の多摩、明治期の徴兵、村の離縁状など、盛りだくさんの内容となりました。

今までの連続講座とちがい、文学作品ではなく江戸時代の日記や事務文書を取り扱うということで、当初はどれぐらいの参加者が見込めるか不安もありましたが、定員の3倍にもおよぶ希望者があり、抽選で受講者を選ぶといううれしい悲鳴をあげることとなりました。初回到古文書解読の経験を探ねたところ、全く古文書を読んだことがない方が約1/3、文学作品は読んだことがあるものの古文書は初めてという方が1/4程度という結果だったため、各回の講座では、くずし字解読のコツや候文の読み方に多くの時間をとって解説しました。

受講者アンケートにも、多くのご感想やご意見をいただきました。古文書の量が多すぎる、時間が短いので全部終わらない、といったご意見もありましたが、講師の立場からいえば、“あれも話したい、これも伝えたい”という意欲のあらわれということで、お許しいただきたいと思っています。また一方で、よかった、講師の熱意が伝わってきた、といったご感想をいただくと、大変励みになります。貴重なご意見を今後の連続講座の運営に活かしていきたいと思えます。

（太田 尚宏）



表紙裏反古ワークショップ

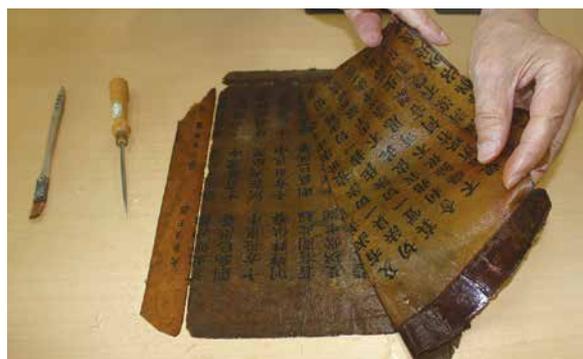
6月26日、標記ワークショップを開催しました。板本の表紙裏に張り込まれている反古紙を取り出し、表紙の作成の方法や、反古紙の情報を調査しようというものです。

当館名誉教授の渡辺守邦先生のご発案で、先生ご所蔵の『法華経直談鈔』を提供していただき、また反古の取り出し方についてのご指導もいただきました。既に見えていた部分から、反古として使われていた紙は、新出の宗存版であることが予想されたため、その研究の権威である小山正文先生にもお越しいたごき、宗存版についてのお話を伺うことが出来ました。

館内外の20人ほどが参加し、日頃経験することのない表紙の分解作業にあたりました。糸を切り、中とじをはずし、水を含ませて表紙の紙を剥がしていきます。二枚の反古紙が重なっていたのですが、かなり強く接着されており、剥がすのに難渋しました。糊で貼っただけではなく、圧力をかけて繊維を絡ませていたのではないかと推量されます。分解の様子はカメラで撮影しました。

貴重な機会を与えていただいた渡辺先生、お話しいただいた小山先生に深謝申し上げます。

このワークショップはJSPS912259「日本古典籍における表記情報学の発展的研究」（代表：今西裕一郎）の研究の一環として行われました。（入口 敦志）



第42回国際日本文学研究集会

The 42nd International Conference on Japanese Literature

当館では、国内外の日本文学研究者による研究発表・討議により、広い視野からの日本文学研究の進展を図り、研究者相互の国際交流を深めるため、国際日本文学研究集会を開催しています。

平成30年度は、以下のとおり開催します。

日 程 平成30(2018)年11月17日(土)～11月18日(日)

主 催 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国文学研究資料館

会 場 国文学研究資料館

内 容 ①研究発表
②ショートセッション発表
③ポスターセッション発表
④シンポジウム(予定)

※研究発表者及び研究発表表題については、9月下旬に決定し、プログラムを当館ホームページにて公開する予定です。

使用言語 日本語または英語

参加要領 ・参加費:無料
・参加資格:日本文学に関心のある方(研究者・大学院生・学生・留学生など)
・申込み方法:後日、当館ホームページにてお知らせします。

(問い合わせ先)

国文学研究資料館 国際日本文学研究集会事務局

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

TEL:050-5533-2911

FAX:042-526-8604

E-mail:icjl@nijl.ac.jp



平成29年度研究発表



平成29年度ポスターセッション

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○平成 30 年度入試説明会

平成30年10月6日（土）13時30分から、平成31年4月入学希望者を対象とした入試説明会を開催します。
詳細は、当館 WEB サイト「日本文学研究専攻」ページにてご確認ください。

<http://www.nijl.ac.jp/~kyodo/soken.files/enter/seminar.html>

多数のご参加をお待ちしております。

<開催概要>

日 時：平成30年10月6日（土） 13:30～16:00

会 場：国文学研究資料館

内 容：日本文学研究専攻の概要、入試についての説明、施設案内、教員との相談会など

○文化科学研究科がハワイ大学マノア校と学術交流協定を締結

2018年2月28日に、ハワイ大学マノア校において、文化科学研究科とハワイ大学マノア校との間の学術交流協定締結の調印式が開催されました。

この学術交流協定は、日本文学研究専攻の基盤機関である国文学研究資料館が従来から行ってきたホノルル美術館所蔵日本古典籍の書誌的調査の実績を踏まえ、総研大の国際連携事業経費の助成を受けて開催した「日本古典籍セミナー2017ホノルル」（会場：ホノルル美術館）が好評だったことから、さらなる交流拡大へ向けて、文化科学研究科として初めて、海外の大学と締結されることとなったものです。

翌3月1日には昨年度に引き続き2回目の開催となる「日本古典籍セミナー2018ホノルル」を開催し、ホノルル美術館所蔵の日本古典籍資料の貴重さや意義、さらには日本文学の魅力をハワイ大学の大学院生をはじめとする参加者にアピールすることができました。

ハワイ大学側からは、日本文学分野以外にも総研大と積極的な交流を図りたいとの意見交換がされ、協定締結に伴い、より一層交流が活発化することについて大きな期待が寄せられています。



ハワイ大学マノア校で行われた協定締結の様子

8月

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|----|----|----|----|----|----|----|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |
| 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | |

9月

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|-------|----|----|----|----|----|----|
| | | | | | | 1 |
| 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| 23/30 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |

10月

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|----|----|----|----|----|----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| 28 | 29 | 30 | 31 | | | |

- 開館：9：30～18：00 ● 請求受付：9：30～12：00,13：00～17：00 ● 複写受付：9：30～16：00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館：9：30～17：00 ● 請求受付：9：30～12：00,13：00～16：00 ● 複写受付：9：30～16：00

展示スケジュール (8月～10月)

通常展示「書物で見る日本古典文学史」
 会期 2018年6月11日(月)～9月15日(土)
 特別展示「祈りと救いの中世」
 会期 2018年10月15日(月)～12月15日(土)
 ※休室日
 日曜・祝日、夏季一斉休業日(8月13～15日)、
 展示室整備日(8月8日、11月14日)

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

国文学研究資料館のゼミ室で、豊富な所蔵資料を利用しながらゼミや講義を行うことができます。
 ※学部・大学院で行っている日本文学や日本史の授業が対象となります。
 ◆詳細は当館 WEB ページをご覧ください。
<https://www.nijl.ac.jp/activity/education/shien.html>

表紙絵資料紹介

『解体新書』 クルムス原著、杉田玄白訳、大本五卷五冊、安永3年(1774)刊

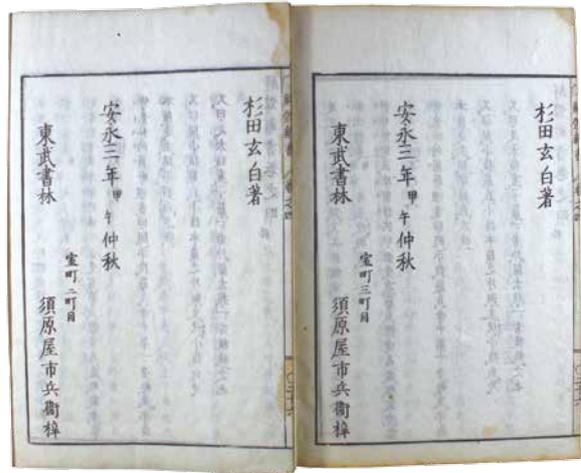
・室町三丁目版 ヤ9/556 ・室町二丁目版 ヤ9/555

ドイツの医師クルムスが1722年に刊行した『解剖図表』のオランダ語訳本(1734年刊)からの重訳本。原著の刊行から約50年後の翻訳出版であるが、当時の交易や日本人のオランダ語に関する能力などの状況を考えれば、相当に早い刊行と言えるだろう。本文4巻と序図1巻とからなり、秋田藩士で平賀源内から洋画を学んだ小田野直武が図を担当した。

須原屋市兵衛によって刊行されたもので、その住所表記に「室町二丁目」と「室町三丁目」の二とおりの版があることが知られている。当館は、それぞれ一点ずつ、二点所蔵するが、残念ながらどちらも取り合わせ本である。

二丁目版と三丁目版の版面を実物で比較してみると、文字のツブレやカスレ、および匡郭の傷など、板木の傷みを示す痕跡が二丁目版の方で増えていることがわかる。よって、両版は同じ板木を用いており、先に三丁目版が刷られ、後に「三」の一画目を削って「二」と修正して刷ったものと考えられる。三丁目版の方には、刊記のあとに広告が二丁半付されている。

(入口 敦志)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8606

発行日 平成30(2018)年8月1日
 編集 国文学研究資料館企画広報室
 印刷所 株式会社 アズディップ
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館